

# 白山麓に残る伝説・民話・昔話



2023年3月

石川県白山自然保護センター

## はじめに

白山は、「日本の百名山」「花の百名山」に選定され、高山植物が多く、ブナをはじめとする豊かな森もあり、動物たちにとってもすばらしい自然が数多く残された地域です。一方で、養老元年（717年）に泰澄大師<sup>たいちよう</sup>によって開山され、古くから信仰の対象とされてきました。歴史的には、白山は、富士山、立山と並び「日本の三霊山」に数えられ、中世には白山修験の霊山として栄え、白山信仰は全国的ものとなり、それに伴い、白山周辺の山村地域に数多くの伝説や民話生まれ、語り継がれてきました。しかし、近年白山麓でも過疎化、村の統合などもあり、各村史に残された貴重な伝説や民話なども目にする機会が少なくなっています。

そこで、今回、白山麓の各旧村の村史をもとに話を抜き出して、できるだけ原文を生かしながら、よりわかりやすいものにできればと語句を変えたり、注釈を加えるなどして再構成しました。

この冊子を通して、この白山麓の各地域で語り継がれてきた伝説や民話を改めて皆さんに読んでいただき、白山の自然だけでなく、地域に昔から残る様々な名称や当時の暮らしぶりなど歴史的文化的な面も含め、この地域をより深く知っていただく一助になれば幸いです。



## もくじ

1. 泰澄大師 <sup>たいちよう</sup> と白山信仰	2
2. 白山の神様	3
3. 飛騨の婆さんと白山の神	4
4. 白山と富士山の背くらべ	5
5. 千蛇 <sup>せんじゃがいけ</sup> ヶ池と蛇塚 <sup>じゃづか</sup>	6
6. 翠ヶ池 <sup>みどりがいけ</sup> ふこうえん地獄	7
7. ドンドケ池	8
8. 天狗壁	9
9. 四塚 <sup>よつづか</sup> と猫ヶ島 <sup>ねっかしま</sup>	10
10. 目附谷 <sup>めっこだに</sup>	11
11. 猿鏡 <sup>さるかがみ</sup>	12
12. 鴻門橋 <sup>こうもんばし</sup> （黄門橋）	13
13. 雷の鳥	14
14. 千石野 <sup>せんこくの</sup> と孝行の豆の木	15
15. 灰まき爺	17

## 1. 泰澄大師と白山信仰

【河内村史より】

古代、能登を含めた越前・越中の地方は「越（高志）の国」と云われ、泰澄大師は、飛鳥時代、越前（現在の福井県）に、日野川水系で船頭を営んでいたとされる三神安角の子として生まれた（682年）。幼き頃より神童の誉れ高く、夢のお告げにより山での苦行難行の末、仏の教えを悟ったと云われている。21歳で朝廷より鎮護国家法師に任命され、後に越の大徳<sup>※1</sup>とあがめられた。

白山は、この泰澄大師によって初めて開かれたとされる。白山は仏の住む禪定の聖山とされ、仏教僧や衆徒によりその信仰の証としての登山、国家鎮護・国土安泰<sup>※2</sup>・衆生済渡<sup>※3</sup>の祈願成就と齋戒<sup>※4</sup>が行われ、信仰登山する者を教え導くとして仏教活動が行われてきた。

泰澄大師は三神安角の子、朝鮮より帰化<sup>※5</sup>した者の子であったから、神と仰がれていた白山に登ったと思われる。自分の祖国朝鮮、高句麗<sup>※6</sup>が隋<sup>※7</sup>の軍により戦乱となって荒廃し、多くの人々が祖国を追われ、日本に帰化したと伝えられている。仏教僧であり、特に十一面観世音を信仰した泰澄は、その様子を憂い、遠く日本海を隔て、高句麗の空を想ったであろう。そして、遠い祖神と云われる高句麗の姫命を偲び、コクリノヒメを祭ったとも云われることから、白山の神はコクリノヒメをキクリヒメになったという一説も伝えられている。ただ、日本書紀には、菊理媛の神名が一文のみに記されている。古事記では、伊邪那岐命・伊邪那美命と記されている。

※1 大徳：役人の位を表し、冠位十二冠の最上位

※2 国家鎮護・国土安泰：仏教によって国をやすらかに鎮め、守ること

※3 衆生済度：仏や菩薩などが、この世で迷い苦しむ生きるものすべてをそこから救い、悟りの世界へ導くこと

※4 齋戒：飲食や行動を慎み、心身を清めること

※5 帰化：その国の国籍をとり、その国の国民になること

※6 高句麗：古代朝鮮の三国の一つ、朝鮮半島北部を支配（紀元前37年-668年）

※7 隋：魏晋南北朝の混乱を鎮め、分裂していた中国を統一（581年-618年）

## 2. 白山の神様

【白峰村史より】

養老元年（717年）、泰澄大師が女神のお告げに従い、初めて白山に登り、山頂転法輪の窟（ほら穴）で、臥・浄定の両行者と共に誓いを立て修行に努めていた時、白山頂上に祭る神霊の姿をこの世に現すことを求め、窟直下の身振りヶ池<sup>※1</sup>で一心不乱に祈った。その時、池の中から姿を現したのは十二の角を振り立てた身の毛もよだつ竜の姿であった。そこで大師は、「それはあまりにも恐ろしいお姿で、衆生済度のお姿ではない、今一度お姿を変えて下さい」と祈念した。すると、竜の姿は消え容姿端麗な女神の姿となって現れた。

この時大師は、「女人禁制<sup>※2</sup>のお山に女神のお姿を神として祭るのは相応しくないから今一度お姿を変えてください」と祈れば、たちまちに莊嚴で慈悲円満なる十一面観世音菩薩のお姿となって現れた。

これこそ、白山に鎮祭すべきお姿だと大喜びをして仰ぎ慕うこと数時、すぐにこれを描きとり、十一面観音の木像を自ら彫刻、これを御前山上に祭った。また、最初に現れた竜神の姿も彫刻し、石の唐櫃<sup>※3</sup>に納め白山比咩神社に祭り、次の女神のお姿は平泉寺に祭った。

白山比咩神社のご神体は竜神なので社殿造営の遷座祭<sup>※4</sup>の時も、どこからともなく八、九十歳ぐらゐの老翁が現れ、真夜中に老翁一人で石の唐櫃のままご神体を他の場所に移し、何処となく立ち去ると伝えられている。

※1 身振りヶ池：717年当時、翠ヶ池はなく、千蛇ヶ池は実在した。長久3年（1042年）の噴火でできた様子が「白山之記」に記述されている。

※2 女人禁制：聖域（社寺、霊場、祭場）への女性の立ち入りを禁止する慣習

※3 唐櫃：4、6本の脚のついた中国風の蓋のついた箱のこと

※4 遷座祭：神殿の改修造営に際して、神霊を移すこと



### 3. 飛驒の婆さと白山の神

【河内村史他より】

昔、飛驒の婆さが白山の頂上に祭られている神様は、エンブタンゴ<sup>\*1</sup>で作られていると聞き、これを売れば高く売れると思い、金欲しさの一念から白山に登り、神様の祭ってある堂から盗み出そうとした。しかし、一尺（約30cm）に足りない金の仏様が重くて持ち上げられず、どうして持ち帰るか思案していたが、神様や仏様は不浄を嫌うと聞いていたことを思い出した。そこで自分がしていた腰巻きを取り出し、ご神体に被せると軽々と持ち上げることができたので、婆は腰巻きに神様を包んで家に持ち帰ることができたという。婆はそのままでは皆に知れるので、ふいご<sup>\*2</sup>で金をとくして売ろうと思い、ふいごで三日三晩吹いたけれどもとけず、婆は目が光でつぶれ、神様は宙を飛んで白山に帰ったという。また、別の地域では、白山から神様を腰巻きに包んで持ち帰り、その神様を七日七夜もたたら<sup>\*3</sup>を使い、火にかけてとかそうとしたけどとけず、金づちで打ち砕こうとしたら仏像の首が宙に飛び、白山の峰に向かって飛び去ったという。その時の光で婆さんの目がつぶれたとも言われる。



尾口村尾添<sup>おぞう</sup>の人たちは神様が盗まれていることに気づき、山を探していたらその神様の首から上<sup>おおなんじがみね</sup>が大汝峰に落ちており、もったいないと村に持ち帰ったところ、越前永平寺の坊さんが京都に持っていき、仏師に胴体をつけてもらい、又元のようにお山に祭られたという。今は尾添白山神社に三重の箱に納められ安置されている仏が、飛驒の婆さの盗み出した仏像であるという。

尾添の伝説は、実物の仏像と結び付けた伝説である。また、尾添の仏像は白山の噴火<sup>じゅういちめんくわんのん</sup>で十一面観音が破壊された時の首の一つであるという。

※1 エンブタンゴ：村史では、ダイヤモンドの原石と注釈があるが、火にかけてとかすという内容から推定すると、金ではないかと考えられる

※2 ふいご：金属やガラスなどをとくすために、空気を送り火力を高める道具

※3 たたら：足で踏んで空気を送る大きなふいご

### 4. 白山と富士山の背くらべ

【河内村史より】

白山の神様と、富士山の神様が<sup>いずも</sup>出雲の国に、年一度の神のつどいに集められた折に、出雲の大山の神様が、二人の神様に「昔から加賀の白山、駿河の富士山と呼ばれながら、どちらの山が高いか」と聞かれた。白山も富士山もまだ背くらべをしていないので、自分の山が高いとどちらも負けずに争っていると、立山の神様が横で聞いていて、それでは白山が高いか富士山が高いか背くらべをしたらよいと仲裁に入り、白山の神様も、富士山の神様も自分の山にお帰り、そこで長い長い樋を作り、富士山から白山の峰に渡し、富士山の方から水を流されたという。

富士山が白山より高いと見えて、樋の水は白山の方にどんどんと流れて来た。白山の神は急いでその辺にある石を積み上げたが、それでも水は白山の方へ流れて来るので、あわてた白山の神がそのあたりに脱ぎ捨ててあった片方のワラジを急いで下に入れると、今度は今までこちらに流れていた水が反対の富士山の方へ流れるのであった。

そこでどうにか勝負には白山の神が勝つことが出来たけれども、心の中でせめてワラジ片方高ければ本当の日本一になれると悔しく思われたという。

そこで白山に登る人々が神様の心を慰めるために、ワラジを片方頂上に置いて来る習わしになったということである。



## 5. 千蛇ヶ池と蛇塚

【白峰村史より】

泰澄大師が初めて白山に登られた時、山上には三千匹の大蛇が棲息して暴れ回り、山麓の住民を悩ましていた。大師は住民の苦しみをあわれみ、三千匹の大蛇を山上に呼び集めて因果をふくめ<sup>※1</sup>、最も兇悪な一千匹を斬って塚に埋めてしまった。これが現在の観光新道の弥陀ヶ原に入るあたりに残る蛇塚である。また、一千匹は、千蛇ヶ池に封じ込め、雪をもって蓋となし、再び世に出られないようにした。もし、雪の蓋が消える場合には池の真上のお宝蔵<sup>※2</sup>がくずれ落ちるようにしたのであった。残る一千匹は越前の大野市五箇町小池の山中なる市ヶ平の刈込ヶ池に封じ込め、三の峰付近の大岩（釵塚と呼ばれている）の上に大剣を立て、その影が池水に映るようにした。大蛇は黒金<sup>※3</sup>をととても嫌い、もし黒金が身に触れると、身は腐ってしまうと云われているので、刀影を見て恐れて池水から出られないようにしたのだという。

※1 因果をふくめる：やむをえない事情であることを説明してあきらめさせる

※2 お宝蔵：宝物や貴重なものを納めておくこと、経典を納めておく建物

※3 黒金：鉄のこと



## 6. 翠ヶ池ふこうえん地獄

【白峰村史より】

昔、越前に、普光院という悪僧がいた。この上ない親不孝者で、常に両親を苦しめ泣かすことはなほだしいものがあった。この悪僧が何を思ったのか白山へ登り、翠ヶ池のほとりに立った。水中に手を入れて水を混ぜると涼気が沁みて気持ちが良い。手を水から上げると、火傷をしたように熱くてたまらぬ。再び水中に入れると涼しいので、次第に手足からつけ始めた。気がつくとも全身が水中にある。身体が重くて動きがとれず、深みへ深みへとはまり込んで、遂に池の中に没して死んでしまった。そこからこの池を「ふこうえん地獄」と呼ばれるようになったのだと伝える。「ふこうえん」は「普光院」であろうが、「不幸因」だとも云われている。



## 7. ドンドケ池 (風嵐谷)

【白峰村史より】

風嵐谷川の二里(約8km)ばかり上流の支流であるチエジ谷川をさかのぼった左岸の森林の中に大池がある。

その昔、春の雪解け時に、熊狩りに数人の者がやってきた。鉄砲打ちが二人、六尺(約1.8m)の手槍を持つ熊追い役が五、六人だった。深い山中のことで雪が溶けず、池も雪水で覆われていた。槍持の一人が「この辺がドンドケ池だ」と云って槍を雪上に突き刺すと、その雪がわずかに割れて池に大きなひびが生じたので、一行は驚いて逃げ出して帰った。

その晩、槍持男の夢に竜が現れて「お前がわが家に私の最も嫌う黒金くろがねを突っ込んだので、千年の半分以上も積んだ業が解け<sup>※1</sup>、天上<sup>※2</sup>することができなくなってしまった。このままにして置いたらお前の命をもらうぞ」と脅かした。その後もしばしば同様な夢を見たが、他にも告げず苦しんだ挙句、檀那寺だんなの住職に事情を打ち明けた。住職は読経の効力によって、竜が誓いを立て修行に努めることでその願いが叶うようにしてやろうと、登山して池のほとりに斎場きょうづくえを設け、経机上に多数の経典<sup>※3</sup>を置き、香を焚いて読経すると、竜はイモリの姿に身を変じて氷上に浮かび上がって一心に聴聞するのであった。住職は経典を載せた経机を池水に沈めて帰った。その後七月十五日に、この池を訪れると経典を置いた経机が、元のままの姿で水上に浮かんでいたという。それから後、その男は難を免れた。

ちなみに、大蛇は山に千年、河に千年、海に千年と三千年の誓いを立てて、修行を積んで天上し、天人<sup>※4</sup>に生まれ変わると云われている。そこで、山中の池や滝、河の淵等には大蛇が棲息するのだと伝えられている。

なお、このドンドケ池は、婦女子がまともに見ると自分の影が大蛇の姿になって映り、驚いて死んでしまうので、直接見てはならないと云われている。そこで男子の陰から僅かに透かして見るだけだとされた。

※1 積んだ業が解け：積み重ねた善行を含めた経験が無駄になる

※2 天上：天国に生まれ変わる事

※3 経典：仏の教えを記した文章・書物

※4 天人：天国に住む、人より優れた者



## 8. 天狗壁 (河内谷)

【白峰村史より】

天狗壁は白峰から牛首川を一里(約4km)ばかりさかのぼった地にある。牛首川の左岸の西山一帯は切り立った岩山で、枝ぶりのよい松杉等の樹木や滝もあり、誠に天下の奇勝である。

古来、天狗が棲むと云えられ、この山には人の手が触れられなかった。したがって、道が通ずるといふようなことは夢にも想わなかった。嫁の来ていない男が、自分に一生嫁のないことを「天狗壁に道ができたら嫁を貰う」となどというほどだった。ところが凶らずも車道が通じたので、人々は「天狗壁に道ができたぞ、早く嫁を貰わんがが」とからかったという。ここに道路を通じるためには非常な苦勞を伴った。与三松という土工が落ちて死亡したのも天狗の祟りだと云われた。そこで今もこの路傍に与三松地蔵を祭っているのである。

天狗壁は一名「ゴキサラ壁」とも呼ばれる。「ゴキ」は御器ごき、「サラ」は皿で、何れも木製塗物の食器をいう。岩壁面が凸凹してお椀を張り付けた形状を呈しているところから名づけられたのである。

秋の好天気の日、出作りの人が白や杵うすきねを持ち出してカマシの穂かち<sup>※1</sup>をしていた。タボゴ(休憩)の時、そこに置いた杵がひとりで飛び出した。あっけにとられていると、杵は天狗壁の突出した岩上に行ったかと思うと、杵が動いて岩頭を白にしてコンコロ、コンコロと打ち始めた。しばらくすると、空中に声あり、「見ていると面白そうだが、やってみるとなかなか辛いものだ。そらなすぞ<sup>※2</sup>」と言うたかと思えば、杵は空中を飛んで、もとの場所に戻ってきた。天狗のいたずらだと云われたものだった。

また、尾口の村史では、「夕方、男の子が遊んでいると、よく天狗にさらわれて、天狗壁に連れて行かれた」という。その天狗は女性にはいたずらしないので、母親の腰巻の切れ端を男の子に持たしておけば連れていかれなかったそうである。

※1 カマシの穂かち：シコクビエのこと、穂がカモの足に似ていることから、カモアシがカマシとなり、その穂を白に入れ、杵でたたくこと

※2 なすぞ：「返すぞ」の意味



## 9. 四塚と猫ヶ島 (尾添)

【尾口村史より】

昔、尾添部落のケチで有名な七太夫の娘は、嫁入り先で先に夫に死別し、実家に帰って生活をしていた。やがて父が死んだが、臨終の際の教えを守って父以上のケチになり、金の他には目もくれぬこと十年、村一番の金持ちになった。この女は猫だけは好きで、いつも可愛がっていた。ある時、猫に「近頃魚を食べぬが、お前はねずみを取るのがうまいから、魚も獲れるだろう。獲ってくるかどうじゃ」と云うと、猫はぐずぐずしていたが出かけていき、夕方二尾の魚を獲ってきた。女は大喜びで猫と共に分け合って食べた。それからはいつも猫が魚を獲るようになった。

数日後、毛色の美しい猫が来たから飼った。以後、女は三匹の猫が戯れるのを見て楽しんでた。しまいには猫と共に走ったりするので、若い者と同じように身体も丈夫であった。ある時、三匹の猫を連れて裏山へ遊びに行ったら、ガサガサと音を立てて一匹の大蛇が大口を開けて襲ってきた。女はびっくり仰天したが、たちまち二匹の猫が飛びかかって、両眼を一つ一つ爪で引っかき、もう一匹の猫は大蛇ののどに噛みついた。女は気を取り直して、腰の鎌を取り出して大蛇を殺すと、三匹の猫は大蛇の肉を食べてしまった。

ある時、女はいつものように三匹の猫と裏山に遊び、池に映った自分の顔を見ると、猫のようなすごい顔になっているし、びっくりして手足を見ると毛だらけになっている。女は猫を愛しているうちに、自分自身も猫の仲間になってしまったことを後悔したが、もう遅い。猫になったら猫の生活をすればいいと思って、家に帰らず洞穴に住むようになった。しまいには、雲を起し、雨を呼び、空を飛ぶことができるようになった。隣村の誰かが死んで墓地に吊ったら、黒雲が下って棺を奪ってしまった。以降、この村で葬式を出すいつもこの災難が降りかかるが、誰もそのわけがわからなかった。



そこで、村の人達が救いを行者に頼むと、「猫も術を知っているのだからしかたがないが、昔から邪は正に勝てないはずだ。三日後に退治してやろう」とのことだった。三日後、風雨雷電が激しくなる中、四匹の猫が泥中から出てくるところを捕らえて、行者のところに連れて行き、その命によって竜ヶ馬場の坂口に埋めて封じられてしまった。大汝の北西にある竜ヶ馬場の四塚はこれだという。

その後、百余年を経て、嘉祥三年(850年)に叡山の僧円住が白山登山の際、猫となった女が夢に現れ、読経などを行って、死者の冥福を祈ることを頼んだ。翌朝早速に行くと、たちまち四匹の猫が躍り出て、尾添の南谷に入った。ここには野良猫の住む洞穴が多いと言われていた。これが猫ヶ島である。

## 10. 目附谷 (尾添)

【尾口村史より】

昔、白山が女人禁制だった頃、あるうぬぼれの強い美人が一人いた。「わたしほどの美人なら、白山の神様が女神であっても焼きもちを焼かないだろう」と、自分勝手に判断して、白山の頂上へと登って行った。最初は不安もあったが、何事も起こらないので気を強くして、八合目までくると大入道が現れ「これ以上登ってはならん」と怒鳴った。女は気にも止めず更に登ると、白山の神様が大変に怒り、その女を二つに割り、その片方を目附谷の方へ投げた。それ以来、目附谷の近くを通ると、片足の女が立っていたり、わらじが片方だけあったりした。

目附谷に棲むイワナは片目であったという。この辺では片目をメッコという。



## 11. 猿鏡 (釜清水)

【鳥越村史より】

釜清水の弘法池の清水尻から30mほどの地点から、河岸の岩の切れ目を通して、手取川の河底へ下りる道がある。下り着いた所は昔の淵で、この淵を猿鏡と云った。

このあたり、昔は猿がたくさん棲んでいたそうで、月夜の晩に猿共は岩に生えた松の木に登って戯れているうち、淵に映った月影を見て、水底に金の玉が沈んでいると思い、拾いとる相談を始めた。猿知恵を絞った結果、猿鎖を作って拾い取ろうということになり、まず一の猿が松の枝につかまり、二の猿がその足を握り、続いて三の猿が二の猿の足と、順番に手足をつなぎ長い猿の鎖が淵へ向かって下りた。最後の猿が手を伸ばして玉を探ろうとする頃、一の猿が重みに堪えかねて、松の枝から手を離したので鎖は切れて何十匹もの猿が一度にばたばたと淵へ落ちてしまった。びっくりした猿共はそれぞれ何とか岸に泳ぎ着き、水をぬぐいながら元の場所まで這い上がっていった。月影は余波のさざ波に千々に砕けて揺らぎ、仲秋の風はさつさつと松ヶ枝に吹き付けて猿共を震え上がらせたと言う。



## 12. 鴻門橋 (黄門橋)

【鳥越村史より】

黄門橋は高門橋とか蝙蝠橋とか呼ばれていたが、鴻門橋という名もつけられていた。

昔、手取川に橋がなかった頃、ずっと川下の粟生というところまで行かなければ川を渡ることができなかった。釜清水と吉野は手取川を挟んで向かい合った近い所だが、この川のために行き来はできない。両村の人達はここに橋が出来たらどんなに便利だろうと思っておった。「お前さんら、この川に橋かけよまいか。そしたら遊びに行ったり来たり、にゃあにゃあやったりもったり<sup>\*1</sup>できるがなんないかね。」「そうや、そうや、お前さんらのいうとおりのや橋かけよまいか。」

両村の人達は橋をかけようという事で意見は一致するが、橋を作っても、それをかける方法がわからない。釜清水と吉野の人達は毎日、川の対岸に集まってお互い首をかしげ、腕をくんで考えておった。ある若者が吉野の方からと釜清水の方から、長い木をかけて作ったらと考え出し、人たちは賛成し、架けにかかったが、対岸まで届く長い木がない。

ある日のこと、いつものように、村人たちが川の岸に集まっていると、なんと黄金に輝く鴻の鳥<sup>\*2</sup>が二羽飛んで来て吉野の方と釜清水の方に向かい合いあった。それを見た両村の人達は「あっ、あれは神の使いだ。きっとこの川に橋をかけよというお告げに違いない。もったいない、もったいない。」と言って、細いひもに石をくりつけて両岸から投げた。そのひもに少し太い藤づるをくり、両岸からひっぱり、段々大きな太い藤づるを両岸に渡した。しまいには大人の太ももぐらいな藤づるを渡すことができた。これに板を乗せ、人の渡れる橋が出来上がった。鴻の鳥があまりにも美しくありがたかったので、この鳥の鴻と、山から見ると門のようなので、鴻門橋と名付けたと云われる。



※1 にゃあにゃあやったりもったり：娘を（嫁に）やったり、もらったり

※2 鴻の鳥：通常全身は白色、風切羽が黒色。翼を広げると、200~220cmくちばしは太く長めで黒色



### 13. 雷の鳥

【河内村史より】

まんまん昔<sup>※1</sup>、白山に雷の鳥がおって、一年中雪が消えん高い山で、そんな高い山でも、昔から雷の鳥というでかい鳥がおって、夏は茶色をしておるが、冬になると白い羽毛に変わる美しい鳥や。雷の鳥は大変ななまけもんで、道楽な鳥やといや。白山のそんな寒い山におる鳥が、夜になって寝る巣を造らんと、道楽で昼間は遊んでばかりいるさかい、夜になると寒くて一晩中寝ることも出来ず、「夜が明けたら巣を造ろう。夜が明けたら今度は巣を造ろう」と、泣き明かしておるといや。

さて、ようやく夜が明けてみると、お日様が出るし、ポカポカ暖かうなると、夜通し巣を造ろう、巣を造ろうと泣いていたことも忘れ、昼寝をしたり、えさを探したり遊んでばかりで、とうとう巣を造らさんかいね、又夜になると、寒さで眠られず、「夜が明けたら巣を造ろう。」と泣いておるといや。

昼でも雨・風の強い日は尚さらのこと、天気の良い日でさえ仕事をせんと遊んでいるものが、天気の悪い日は、なおさら仕事がいやになり、岩陰やハイマツの下に隠れて休み、自分の子供さえ岩陰のハイマツの下に卵を産んで、育てるのがやっで、なまけ者の道楽なんやといや。

白山は夏でさえ雪が消えない寒い山やね、雪の降る冬になったら、どうして暮らすやら、白山の雷の鳥やー。今も尚おるといや。ダラな<sup>※2</sup>鳥やなー。

※1 まんまん昔：どれくらい昔かわからない（遠い昔を表すときの定型句）

※2 ダラな：人をけなしたり、叱ったりする時に使う言葉



### 14. 千石野と孝行の豆の木

【河内村史より】

昔、吹上<sup>ふきあげ</sup>の集落に親孝行な娘がいた。その娘は幼い時に母と死に別れ、後添いとして来た継母<sup>けいぼ</sup><sup>※1</sup>は意地の悪い女であった。その女は自分にも一人の女の子ができると、自分の娘が可愛くなって、継子<sup>けいこ</sup><sup>※2</sup>は益々憎くなった。女は継子には何時でも粗末な着物を着せ、自分の子にはきれいな物を着せて可愛がっていた。或る日、余りに世間の人があんまりやと言うので、二人の娘に千石原で豆を蒔いて来るように言いつけた。その際、継子には炒り豆<sup>※3</sup>を持たし、本子<sup>ほんこ</sup><sup>※4</sup>には生の豆を待たせた。後で継子の蒔いてきた畑に豆が一本も生えないのを、世間の人に見てもらい、継子が道楽で畑がよく打たずに豆を蒔いたから一本も生えなかったと言いふらすつもりであった。

二人の娘は何も知らずに家を出て、集落の上の坂道を登り、清水の出る所まで来ると二人は一休みをした。継子の持って来た豆の袋からよい匂いがするので、本子は継子にそのよい匂いのする豆を少し分けてくれるように頼んだ。すると、継子も自分の持って来た豆の袋を出して、豆を調べてみると自分の豆が全部われ炒り豆で、これでは一本も豆が芽を出さず、後で豆が芽を出さないのを何かと云われるのに違いないと思い、自分の豆を取り出して食って見せ、おいしそうにしていると本子はどうしてもその豆を自分にくれるように頼むので、一粒の生の豆と一握りの炒り豆を交換して二人は畑に行き、それぞれ豆を蒔くことになった。

日頃遊んでばかりいた本子は急に畑を耕すことは出来ず、畑は打たずに豆を蒔き、継子は一粒の豆を大事にして、神や仏にこの一粒の豆に千石<sup>せんごく</sup><sup>※5</sup>も豆が実るようにお願いして蒔いた。継子の蒔いた豆は少し芽を出したが、始めは畑に豆が見えないくらいであった。

そうした様子を継母は皆に見てもらい、いかに継子が道楽者で、大事な豆が少しも見えないと散々悪口を言って憎んでいたが、やがて、一粒の豆が次第に大きくな

※1 継母：血のつながりのない母親

※2 継子：自分の子であるが、血のつながりのない子

※3 炒り豆：芽が出ないよう火にかけて炒った豆

※4 本子：血をわけた本当の子

※5 千石：一石は約150kg相当にあたり、約150t

り、秋になる頃には天にも届くように大きくなって、豆の房がたくさん実った。村人も始めは継母の言い分を聞いていたが、豆が大きくなり天にも届くばかりになったのを見て、継子に炒った豆を持たしたこともわかり、あれが孝行の娘が植えた豆の木や、神や仏のお慈悲であんなに大きくなったのだと話し合っていたという。

秋の豆の穫り入れとなり、この豆の木をどうしたらよいかと思案したところ、豆の木を切り倒すことになり、皆でその木を切り倒したら、その豆の木がドウと倒れた所が久保という処のドウまでも届いたので、それからは向いの久保の処をドウと呼ぶようになったという。

又豆が飛び散り、その豆がタラタラと流れ落ちた壁をタラタラ壁と呼び、今はその下の畑もタタラと呼ぶようになっている。また、多くの豆が川に流れたが、その豆が七石（約1t）も流れついた所をななくぼ七窪と呼んでいる。豆は、直海谷川から手取川に流れ、広がっている河原に豆が十八石（約2.7t）も流れついたと云われ、それから十八河原と呼ばれるようになった。

継母は自分が継子に意地悪いことをしたことが恥ずかしく、自分の心が醜いものであったことを改心して、倒れた豆の木を切り出し、豆の木で太鼓の胴を2つ造り、一つは白山宮に奉納し、神仏に罪業の深いことと懺悔ざんげ※6し、もう一つは集落のお宮に奉納した。

※6 懺悔：自分の以前にした行為が悪いことと気づき、悔いて告白すること



## 15. 灰まき爺

【尾口村史より】

昔あったといね。爺と婆がおったい。爺は山に柴刈りに行くし、婆は川に洗濯に行った。そしたら、川上から桃がポコリポコリと流れてきて、婆、それを拾うて、一口食って半分爺に持って行こうと思ったら、あんまりうもうて、みな食うてしようた。ああ、こりゃ弱った。爺に半分くれよと思うたら、みんな食べてしまって弱ったと思うて、そして川上の方向いて、「もう一つ来い来い、爺にくれよう、もう一つ来い。爺にくれよう」と云うたら、また桃が川上からポコリポコリ流れてきた。「ああア、嬉しや、爺に土産がある」婆、それを拾うて家に持って戻って、これをどこに置こう、こりゃ一番良いところは、かち臼のつぼに入れて置くことと思うて、そしてかち臼のつぼに入れて蓋をしておいた。

そしたら爺や山から帰ってきて、

「婆、婆、ひだるい（お腹が減った）」

と云うたら、

「おう、ひだるけりゃ、かち臼の中に桃があるさかい、爺や食え」と云うたら、爺

「そうか、そうか」

とかち臼の蓋をとったら桃がない。

「婆、婆、桃がない」

なに、あるまい（あるはず）や。うら、あの今朝持って来て入れておいたやからあるわい（あるはず）」

「そんな桃やないけど、コロコロ犬（小犬）がおるわい」

「そういうものになっておるのが桃や」

と云うたら、「そんなら縄でひっぱり出して見しよう」と爺や、首に縄つけてひっぱり出した。爺やひっぱり歩いて歩いたら、コロコロと歩いて大判小判をペタペタとこいた（身体の外に出す）。婆やひっぱり歩いて歩いたら銭こいた。そうして、大判小判でいっぱいになった。

そしたら隣の婆や来て、「ここはどうしてこうに（こんなに）大判や小判やらある」「コロコロ犬をひっぱり歩いて歩いたら、大判と小判とこいてや」「ああ、そうか。そんならうちにも一日貸してくれ」「おう、貸せるさかい持っていけ」そして隣の爺やひっぱり歩いて歩いたら、馬の糞をホロホロこくし、婆やひっぱり歩いて歩いたら、牛の

糞ベタベタとこく。

そして、「こりゃ、隣にゃ大判やら小判やらこく。婆ひっばって歩いたら、銭こいた。うちに借ってきたら、こういうんや」

犬を借りた爺はせいもんで（腹を立て）、かち殺してジロ（囲炉裏）<sup>※1</sup>へ入れて燃やした。

そしたら、犬を貸したほうの爺は、借りた爺にゃコロコロ犬を持って来るかと思ったら、もう持ってこいで、今度はとりに行った。

「ここはコロコロ犬、ないてくれ（返してくれ）」

「コロコロ犬やおらん」

「どうしたい」

「お前とこじゃ大判や小判やこく。うちや爺ひっばって歩くと馬の糞をこく。うらひっばって歩くと牛の糞ベタベタこく。せいがもめて（腹が立って）かち殺いて（叩き殺して）、くべてしもた（燃やしてしまった）」

「ああア、悪いことしてくれたな。そんならその灰でもいくてくれ（よこしてくれ）」

「おう、そのジロの隅で焼いたわ」

ちゅうたら隣の爺や、みんな灰を集め持って、殿様の林でコンコンと木を伐っていた。

そしたら殿様、

「そこにおるものは何もんじゃ」

※1 ジロ（囲炉裏）：昔の日本の家屋において、床を四角く切って、そこに灰を敷き詰め、薪や炭火などを配置した所、暖をとったり、煮炊きにも使う



「日本一の灰まき爺や。枯木に花を咲かせます」

「ほんなら一つまいてみよ」

と殿様が云わっしゃった。爺やパーと灰まいたら、枯木に花がピューンと咲いたやと。

「ああ、これは見事な花が咲いたな」と。そして、赤い包みに金をいっぱいくれたと。

そして家へ持って行って置いとったら、また隣の婆が来て、「ここには、どうしてこんなでかいこと（たくさん）金がある」

「うちにゃ、灰まいたら、殿様赤い包みに銭いっぱいくれて、こんなに銭があるんじゃ」

と云うたら、隣の婆、欲張り婆で、

「他の爺ら、灰まいてさえ銭もろて（もらって）来るに、うちの爺ら何もできん」

と云うた。ほしたら、隣の爺や、

「そんなら、うちにも灰いくせ（よこせ）」

と云うて、灰持って、ゴッチンゴッチンと殿様の林で木を伐とったら

「そこにおるは何もんじゃ」

と云うた。そしたら、

「日本一の灰まき爺や」

「そんなら一つまいてみよ」

と云うたら、

「枯木に花を咲かせます」ちゅうて、パーッとまいたら、殿様の目に灰がいっぱい入って、殿様は怒り、その爺をそこに蹴落とした。そうして、爺や死んでしまうた。

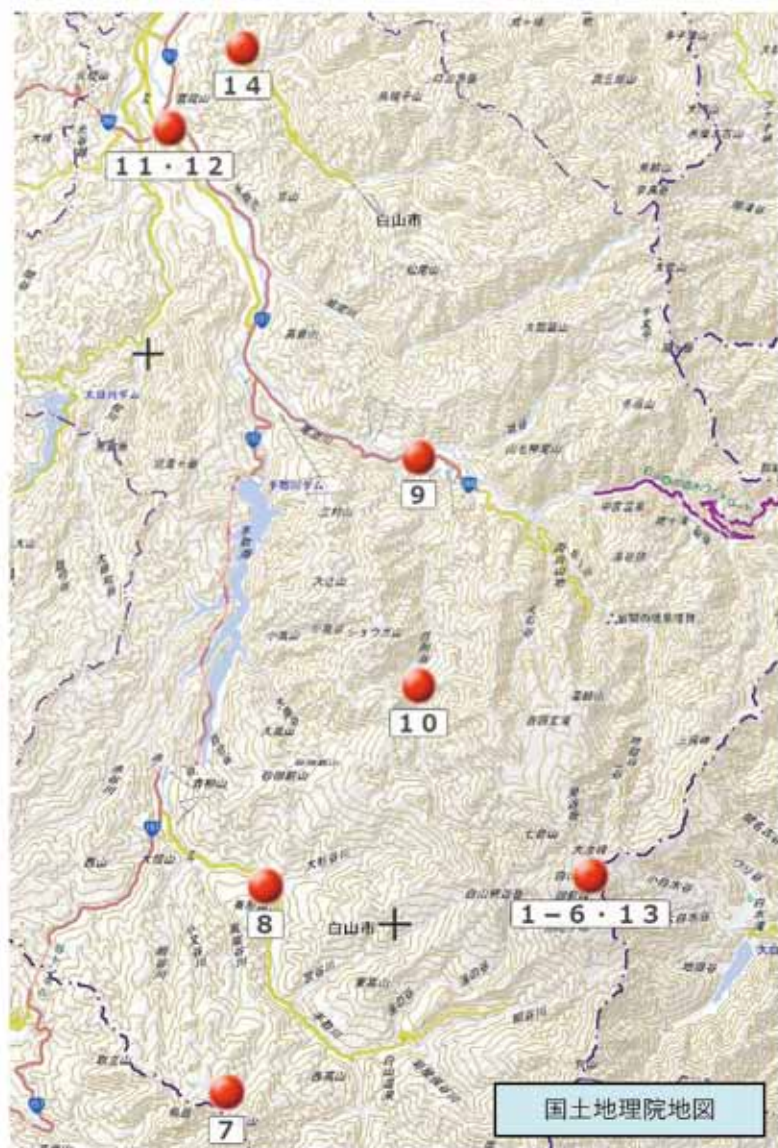
そしたら婆、もう来んもんじゃさかい（なかなか帰ってこないの）見に行ったら、爺や死んどった。爺を燈芯<sup>とうしん</sup><sup>※2</sup>でからげて（縛って）、荷のうて（背負って）来たと。ソロバンガッチリガンナマス<sup>※3</sup>。

※2 燈芯：燈油に浸して火をともしむも状のもの

※3 ソロバンガッチリガンナマス：「これでおしまい」「めでたしめでたし」など昔話の最後にくる決まり文句の一つ

## 伝説・民話・昔話が生まれた地域

※各番号は、目次番号に対応



## おわりに

白山麓のそれぞれの地域で伝承されている伝説・民話・昔話はどうでしたか。

今回、この冊子の中でご紹介したものは、白山麓の各旧村の村史に記載されたものから、白山や手取川にゆかりのあるものを中心に紹介させていただきました。その中には、「灰まき爺」のように、一般によく知られた話「花咲爺」ととてもよく似た部分が多く、興味深いものもありました。この機会に、全国各地に多く残るよく似た昔話や伝説を読み比べてみるのもおもしろいかもしれません。

また、話に登場する人物が本当に実在したのか、古事記や日本書紀、各地に残る史記などを読み進めるうちに、ひょっとすると単なる伝説ではなく、実在を裏付けるような新たな発見があるかもしれません。

皆さんもこの冊子をきっかけに、解明されていない歴史の謎、未知の世界の扉を開いてみてください。

最後に本誌を作成するにあたり、下記の文献を引用・参考にしました。各村史の編集に関わられた方々には感謝・お礼申し上げます。

引用・参考文献 1959年 白峰村史（下巻）  
1975年 石川県鳥越村史  
1979年 尾口村史（第二巻・資料編二）  
1983年 河内村史下巻（下巻）

白山の自然誌 43  
**白山麓に残る  
伝説・民話・昔話**

発行日 令和5年3月31日  
文・構成 川畠 敦仁  
挿 絵 内藤 恭子  
発 行 石川県白山自然保護センター  
〒920-2326 石川県白山市木滑ヌ4  
Tel. 076-255-5321 Fax. 076-255-5323  
<http://www.pref.ishikawa.lg.jp/hakusan/index.html>  
E-mail : [hakusan@pref.ishikawa.lg.jp](mailto:hakusan@pref.ishikawa.lg.jp)  
印 刷 株式会社 中川印刷